

霊能力者栗原茜の乳辱膨乳事件簿

……北九州を中心に活動していたカルト的宗教団体が、警察の強制捜査を受ける直前になって本部施設に火を放って集団自殺を遂げたのは一九八五年のことであった。

のちに「乳罰教団」と呼ばれるようになるこのカルト団体は、主に未婚の非モテ童貞の男性たちによって構成されており、女性に罰を与えることを主目的に据え置き、その際の手法として女性の象徴である乳房に拷問を加えるという、名称から教義内容にいたるまで、おおよそふざけているとしか思えない新興宗教団体であるのだが、警察が強制捜査をおこなうに至った過程理由を知ったならば、背筋も凍りつくに違いなかった。

この教団が結成されたのは、彼らが教団本部に火を放つ一〇年前の一九七五年のことである。年間の婚姻件数が一〇〇万件以上、男女の生涯未婚率が三から五パーセントという低い数値で推移していた時代である。結婚して当たり前、結婚して一人前という価値観が蔓延っている最中、結婚どころか女性経験も恋愛経験も無いような者たちがどのような不遇な立場に置かれていたか。それを紐解くためには、まず、一般の人々が抱く「当たり前」や「普通」と言った感覚から考察していかなければならない。

世間一般が抱く「当たり前」とか「普通」といった感覚は、言葉で表現するのは実に簡単なことであるが、その内容を突きつめてゆくと、まるで思考の罠に陥るように複雑怪奇なモノと化してゆく。十人十色という言葉があるように、人それぞれが持ち合わせている感覚

の物差しは、その長さから幅にいたるまで、ひとつとして同じモノが無いからである。しかしながら、前述の言葉を「平均」という単語に置き換えることによって、「当たり前」や「普通」と言った内容を可視化することが容易くなる。成績にせよ、所得にせよ、婚姻年齢にせよ、保有資産の額にせよ、上位から下位までの全ての数値を総合し、それを同数で割ることによって出現する数値こそが世間一般でいうところの「当たり前」であり「普通」であるからだ。自分の立ち位置を知るために、これほど便利なツールは他にないであろう。

しかし、この便利なツールは、当てはめられた当事者に残酷な現実を突きつける結果にもつながる。出現した数値の平均以下の存在――つまりまるところ、社会一般からの「落伍者」の炙り出しを容易にしてみようからだ。

世間には「自分らしさ」とか、「その人らしさ」とか、「オンリーワン」とか、「世界にひとつだけの花」とか、「普通」や「平均」から取りこぼされた人間を慰める言葉が無数に存在しているが、それでも「落伍者」という辛辣な現実を突きつけられ、またレッテルを張られた当事者からしてみれば、それらの言葉はなんの意味もなさず、役にも立たない。なぜならば、レッテルを張られた当事者たちは知っているからだ。人間は、いかに綺麗な言葉で取り繕おうとも、社会から零れ落ちた存在に対しては冷たくあたり、なおかつ嘲笑する生物だということ。

教団が結成された一九七五年当時は結婚して「当たり前」であり、「普通」とされる時代であった。そんな中において「結婚ができない者」あるいは「結婚をしない者」がどのような扱いを受けるかは想像に容易い。後者であれば世間の関心など気にも止めずに独身の自由を謳歌して過ごすことができるかもしれないが、前者の場合は悲惨

極まりない。結婚がしたくてもできない、という心境は、目に見えない爪牙となって当事者の精神を搔き巻くが、それは周囲からの圧力によって増悪し、より一層、苦しめる結果に繋がる。そして、その苦しみに苛まれた一部の者たちが、ソレから逃れるために、教団を結成したのであった。

結成と言っても、教団も最初から「宗教」として設立されたわけではなかった。結成当初は「落伍者」たちが愚痴を言い合うだけの場に過ぎず、その内容にしても、酒の力を借りなければ言えないような不平不満が主であった。それが一年、二年と時を経るごとに次第に過激化していったのは、負の科学反応が起こった結果であった。単なる愚痴の言い合いが、相乗効果によって次第に増幅されてゆき、さらには自分たちの考えや常識までもが侵食されていって、ついには自分を「認めない」あるいは「受け入れない」女性たちに対する憎しみへと変わっていったのである。

「自分たちが結婚できないのは全て世の女たちのせいだ！」
という極論に達した彼らは、世の女性たちに対して激しい憎悪を抱くようになり、彼女たちを罰することこそが「正義」だと錯覚するようになって、次第に攻撃的な行為に討って出るようになっていったのである。

「女は不浄な存在だ！ 奴らは世の中の善良なる男たちを不当に虐げることによって快感を見出しているだけでなく、社会的、経済的、精神的など、暴力を伴わない虐待方法を用いて男どもを苦しめ、それを見て嘲弄することを生きがいとしている生物だからだ！ これは許しがたい暴挙である！ ゆえに、女たちを罰するべきだ！ 肉体的に、精神的に、痛めつけ、苦しめるべきなのである！ 女たちを苦しめて苦しめて苦しめぬくことこそが、彼女たちを救済する唯一の

方法であるからだ！」

常人には理解不能なこの発言は、好意を寄せた女性に借金をしてまで多額の金銭や物品を貢いだにも関わらず、結局はゴミを捨てるように振られ、さらには自己破産をしなければならぬほど経済的に追い詰められた挙句、精神的におかしくなってしまったメンバーによる発言だったのだが、他のメンバーはそれを否定するどころか肯定し、この発言を基軸として行動するようになっていったのは、多かれ少なかれ、他のメンバーたちも同じような経験をしていたからであった。

彼らが口にする「女性に対する罰」。それは女性を拘束し、衣服を剥ぎ取り、鞭で打ったり、蠟燭を垂らしたり、乳首やクリ○リスをつねったり、顔面に放尿したり、あるいは顔や髪の毛に精液をかけたりといった性的虐待行為であった。

彼らはこれら行為を「儀式」と呼び、女性を救済するための措置だとして自らのおこないを正当化した。

この「儀式」の犠牲となった女性の数は最終的に数十人に達することになるのが、最初のうちは主にそれら行為を金銭で専門に請け負う風俗嬢を雇っていたため、この段階ではまだ真の犠牲者が出るにはいたらなかった。だが、この一連の行為が、結果的に呼び水の役割を果たしてしまい、彼らの行動をより過激化させていったのは紛れもない事実であった。

「女こそ悪だ……この世でもっとも悪しき存在なのだ……」

「女を苦しめることは正しいおこないなのだ……正義なんだ……」

「もっと……もっとだ。もっと女を苦しめたい……」

「もっと、もっと、もっと……」

「女を苦しめて苦しめて悲鳴を上げさせて泣き叫ばせることこそが、男を蔑む女たちの贖罪に繋がるのだ……」

「ゆえに……もつとだ……」

「もつともつと、女たちを苦しめさせなければ……」

「女たちを……救済しなければ……」

彼らは元々、女性経験が無いどころか、まともにキスをしたことも、触れ合ったことも無いような連中である。当然、生の女性の裸など母親以外に見たこともなかった。それがいきなり、数の力を借りてとはいえ、過激かつ暴力的なSMプレイに走ったのだ。脳内麻薬がドロドロに分泌されて、それに伴って前頭葉が破壊されたのは明らかであった。

合法的な範囲で行われていた性的虐待行為が、ついに一線を越えるまでにはそう時間がかからなかった。この時、暴走した彼らを止める者は、もはや内部には存在しなかった。

警察の捜査によって判明した最初の事件は、一九八三年のことである。この頃、彼らは北九州の山奥にある廃業したホテルを共同で購入し、そこを「本部」と呼ぶようになっていた。ここが一連の事件現場となり、最初の犠牲者となったのは二十歳の女子大生であった。

最初の犠牲者となった女子大生は、帰宅の途中に拉致され、彼らの本部に連れて来られた。そこで彼女を待ち受けていたのは、おぞましいほど凄惨な運命であった。問答無用で全裸にされた彼女は、その乳房を、徹底的に凌辱し尽されたのである。

「ひぎいやああああああああああああああああああああああああああああああツツツ！ 痛いッ、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ！ や、やめれええええええええええええええええツツツ！ おおお願いですか

「もつと乳房が大きい女を連れて来なければ……」

「巨乳……爆乳……超乳……違う違う……もつともつと大きな乳房が必要なのだ……」

「女たちを救うためには……もつと大きな乳房が必要なのだ……」

「もつと……もつと大きな乳房に責め苦を……」

発狂した彼らには、もはや自分たちが何を言っているのかさえ理解できていなかったに違いない。女性に対する憎しみは、この頃になると乳房に対する執着へと変貌するようになっており、とにかく胸の大きな女性を拷問することにのみ焦点があてられるようになっていた。

しかし、教団の破滅は突然だった。拉致した女性が、教団の本部から逃げ出したのである。

その女性は、友人とふたりで帰宅している途中に、教団のメンバーによって拉致されて本部まで連行された。そして友人の方が先に乳辱拷問を受けることになったのだが、その最中、割れたガラスの破片で自分を縛っていた縄を切断して逃走したのだった。そして運よくハイカーに拾われた女性は、そのまま警察署に駆け込み、事情を説明して助けを求めた。

警察は最初、女性の話を半信半疑で聞いていたのだが、拉致された女性と友人がふたりとも巨乳であると知ってから態度を変えた。実は、警察の内部では胸の大きな女性の失踪が相次いでいると話題になっており、その失踪がなんらかの事件性があるのではないかと考えられていたからだ。

通報を受けた警察はすぐに出動し、駆け込んできた女性の案内のもと、彼女たちが拉致されていたという山へと向かったのだが、その

最中、山が炎上していることに気づいた。拉致した女性が逃走したことに気づいた教団側が、事件が発覚したことを悟り、本部施設とその周辺に火を点けたのであった。乳罰教団の、これが呆気ない最後であった。

鎮火後の捜査によると、死亡した教団のメンバーは二七人で、中には有名資産家の息子や某大手企業の創業者の次男などが含まれていたが、その他大勢の者は身元が判明するような物を所持しておらず、さらには歯科治療の痕跡も無い者たちだったため、氏名どころか年齢すら判明にいたらない者も多かった。

その一方で、犠牲となった女性たちは全員が遺族のもとへ還ることができた。彼女たちの遺体が捨て置かれていた地下室にも火の手は及んでいたが、燃え残った所持品や遺体解剖によって得られたデータの照合がおこなわれた結果、被害者全員の身元が判明したため、茶毘に伏された後、遺族の下に遺灰が届けられた。その際、警察の配慮によって、犠牲者たちの悲惨な惨状は伏せられていたのだが、これを嗅ぎつけたのがマスゴミであった。

事件のあまりにも陰惨な内容に、多くのニュース番組が報道を控える動きをする中、タブロイド紙や週刊誌を中心に、事件内容を面白おかしく書き立てまくったのだ。

それら記事のタイトルには「非モテの狂気」「害悪と化した童貞集団の悪行の数々」「女性たちはいかにして殺されたか」などの刺激的な表題が載せられて、世間の注目を集めると共に、事件を嘲笑するような記事内容に日本中から苦情が殺到した。

しかし、日本でも類を見ない凶悪犯罪であるにも関わらず、次第に報道が沈静化していったのは、マスゴミが犠牲者やその遺族たちをおもんぱかったからでなく、日本航空一二三便墜落というセンサー

シヨナルな事故が発生したからであった。これを機に、乳罰教団の事件は自然に、そして意図的に、風化していったのであった。

だが、しかし……狂気がまだ沈静化していないことに、気づいている者は限りなくゼロであった……。

……続きは本編でお愉しみてください。